



今号の写真は、先月行った入笠山で撮ったイチヨウランです。まだ咲き残っていてラッキーでした。その際にヤマシャクヤクの木があることに気がつきました。すでに花は終わって実生になっていましたが。来年の楽しみが増えました。

さて、9月の確定表をお送りします。秋の花旅シリーズの最初は、ナンバンギセルです。ススキなどに寄生する寄生植物です。美しいかと言えば、意見の分かれるところですが、とてもユニークな姿をしていると思いませんか。次のシュウカイドウもユニークな姿では引けを取り

ません。美しい色彩で、魅了します。シュウカイドウの咲く寺として知られた栃木の古刹を訪ねます。続いて入笠山のエゾリンドウ、高尾山でツルギキョウ、最後は巾着田の曼珠沙華です。実は9月は6月に次いで2番目に降水量の多い月です。秋の長雨の季節ですから。ただ、降水日数はそこまで多くないので、天候に恵まれるよう期待しています。

「初代の神武天皇から126代にわたり、ただ一度の例外もなく男系で継承されてきた」あるいは「今年は皇紀2686年」など、皇室典範の改訂をめぐる動きの中で飛び出してきた自民党役員や国会議員の発言です。「男系男子による皇位継承」の根拠を、「日本書紀」に求めています。まるで戦前にタイムスリップしたのか！？と驚いてしまいます。その皇室の祖といえば、「天の岩戸」の神話でお馴染みの天照大神ですが、女性ですよ。天皇は女系から始まったのではと思いますが。このことから古代の日本では、男系とか女系とかのこだわりはなかったのではないのでしょうか。神道学者で皇室研究者の高森明勅氏によれば、「日本らしさを証明するのが、推古天皇から江戸時代まで10代8人の女性天皇の存在だ」。中国や緒戦半島と比べても「日本は女帝が多い。日本がもともと女性君主を排除する考えのない国であることは明らか」「皇室では、男系・女系、言い換えれば父方・母方の血筋がともに血統としての意味を持つ『双系』的な血統観が機能してきたのが日本の伝統」「男系・女系の語も明治になって使われ出したものだし、『万系一系』という語も岩倉具視の造語」と述べている。

「男系男子による万系一系」という言葉も明治になって登場した考えで、明治維新以降の富国強兵による専制君主制の国家建設に導くための歴史の偽造でしょう。古くから続く旧家を見ても男系・女系などにはとらわれず、女性も相続権を持つことで何代も続いてきていることは知られたことです、そんな柔軟性こそが日本らしさでしょう。国家主義的な考えの色濃い高市政権ですが、こんな「皇国史観」を今更持ち出して、この国をどこに導こうというのでしょうか。とても違和感だらけの今日この頃です。

暑さにめげず、でも暑さ対策も忘れずに、大いに野に山に出かけましょう！
それでは皆さん、また山でお会いしましょう！